

「団子坂のケネディ」

堀内 稔

昭和五十五年の元旦。いつもの正月のつもりで午後から大平邸に年始に出かけた。電車の上野毛駅から歩いて行つてびっくりした。大平邸前の道路は警官が柵でブロックしていて物々しい。おつかないが、引き返すのもと思つて突破し、玄関でも屈強な私服の護衛さんの質問を浴びながら、あげてもらつた。考えてみれば、内閣総理大臣ともあるう方に、こちらの勝手な時間に面会しようという方がおかしい。前年は欠礼したので様子を確かめればよかつたのに、せずに出向いた私がつかつたのである。だがしかし、おかげで年賀客はその時一人もなく、総理ご夫妻に「単独インタビュー」という仕儀になつたのは、考えもせぬ幸運であつた。

短時間ながらあれこれと話をし、私なりの苦言を呈するのを大平さんはいつもと変わらぬニコニコ顔で「ウン、ウン」と聞いておられた。例の「四十日抗争」などでさぞ消耗しておられるのでは、とひそかに考えていた私は、「タフなものだ」と内心、舌を巻いた。辞去する際、夫人が「この人、このころあまり他人の言うことを聞かないから、またきていろいろ言つてちょうだいよ」と冗談を言われた。大平さんは、アハハと笑われた。けれども、そんな機会は再び私に訪れなかつた。大平さんとは、官房長官になられた時からまる二十年のお付き合いである。官房長官時代の大平邸は文京区駒込林町（現在の千駄木三丁目）にあつた。本郷通りから団子坂を通つて、われわれ当時の大平番記者は朝も夜もかよつた。アメリカではケネディが希望の星と映つた時代である。われわれは大平さんに敬愛の情をこめて「団子坂のケネディ」という尊称を奉つていた。

その「団子坂のケネディ」氏が、外相として初の外遊で北欧三国と英、仏を夫人とともに歴訪された時、私は同行した。同僚からうらやましがられた旅行だったが、そのなつかしい思い出はスライド写真に収めてある。

東京オリンピックのフィナーレとともに池田内閣が退陣すると、大平さんは『浪人生活』となる。四十一年十二月の自民党総裁公選で佐藤再選の時、前尾繁三郎氏に四十七票が投ぜられた。そこに至る旧池田派の内情取材で大平さんを追いかけて回した私は、決定的な方向をつかむことができたが、その後のある夜、瀬田の太平邸で、仕事をせり合った某社の某記者と二人、「大平塾の優等生だな」と持ち上げられて、プレゼントをもらったことがある。私のいただいた日本画の梅の花一枝は、正月がくるたびに何の趣もないわが家にあつてひとときわづらひである。読書家の大平さんがいま何を讀んでいるかは、興味のあることだった。四十五、六年ごろのある日、「その本は何ですか」と尋ねると、大平さんは手にしていた本のページをめくり、声を出して讀み出した。「……佐藤は、国民の間に人気のある、そのギョロリとしたまなざし、その『欧州的』な目を、逆に負担として感じねばならなかった。彼の目は大きすぎ、よく見えすぎ、輝きすぎるといふことになっていた。日本人は、ナゾめいてあまいな目を愛する。首相の記者会見のときには、『眠っている』大平元外相のような目がよい」

東京駐在が長かった西ドイツのジャーナリストの著書の一節だったが、「これだよ」と大平さんはごきげんだつた。ポスト佐藤をねらう一人としてこの時代の大平さんは、佐藤栄作氏との個人関係のバランスシートなど、佐藤さんを強く『意識』していたことが言動に表れたが、そのなかでもこれは私の印象に強く残っている一つである。ポスト佐藤四代目で大平さんが権力の座に就いた時、私は政治部を離れていた。大平さんが全く思いがけず他界され、五カ月足らずして私は政治部長になった。なるつことなら、大平さんの生前に部長として大平政治を議論してみたかったと、残念でならない。

(読売新聞政治部長)